

アフリカの人々と名付け 32

「移行を生きる者」としての女性と子称

小馬 徹

アフリカ各地では、植民地化から独立を経て今日に到る近代化の過程で、個人名や地名の変化を巡る様々な葛藤が見られた。それは、アフリカ大陸全体が一斉に「世界史」に登場させられた巨大な過渡期の出来事であった。

初代ケニア大統領ケニヤッタは、この期にあって、最も劇的な移行を身をもって経験し、また進んで表現した人物の一人である。前回の掉尾で紹介した通り、彼は人生の転機に幾度も意図的に名前を変えた。それは折々の社会状況での地位と権力の配分と相関しており、彼の新たなイメージ創り戦略と深く関わっていた。

移行を生きる女性という存在

ところで、人類史の始まり以来、いわば個人としての全ての女性がケニヤッタにも匹敵する劇的な移行過程を経験して来たとも言える。

人間は、インセスト・タブーによって群の内と外を分節し、家族を成立させた。家族とは、その内部に生まれた異性と結婚を禁じられた集団であると規定できる。つまり、家族が成立するとその内部の女性は性的な消費の対象ではなく、他の家族との間で交換される存在となる。そして、この交換の客体である女性は家内領域に閉じ込められ、交換の主体として女性を管理する男性が公的な領域を司る。

歴史上何処でも交換の主体は例外なく男性であり、客体が女性であったのはなぜか。それは、交換されるのは常に希少なものであり、新石器時代以来女性こそが希少になったからである。農耕・牧畜の成立によって土地が生産手段となり、人間集団はその生産手段を世代を超えて専有する欲望を抱いた。だから、女性の希少性は子供の希少性に基盤をもっているのである。女

性一人と男性十人の組み合わせとその逆の場合の人的再生産の効率を想定すれば、女性の希少性は明らかだろう [小田亮「不毛の性」、須藤健一・杉島敬志(編)『性の民族誌』1993]。

女性の交換としての結婚

今日では人類学上の常識となっているが、最初に結婚を女性の交換として明確に規定したのは、レヴィ＝ストロースである。

彼によれば、インセスト・タブーによる女性の内部的消費は、集団による女性の交換（結婚）ばかりでなく、同時に（多くは女性の移動と逆方向への）財貨の移動としての経済（結納＝婚資）と、メッセージの双方向的交換である言語とを生み出した。そして結婚という制度に基盤を持つこのような多次元的な交換は、集団を結び合わせ、地域社会を形成したのである。

こうして、ヒトは動物の環境結合性を一気に脱して人間となった。人間に固有なエロスとしての性愛は、異性の魅力にまつわる情熱的・感傷的な出来事をもたらし、それらの出来事は個人の内面や生の妙味に直結している。そのエロスもまた、最も親密な女性たちを諦めるインセスト・タブーから派生したと言えよう。

女性の交換の超克へ

ところで、本能とは自己の生命の保存と集団の維持に関わる先天的な情報システムである。人類学によれば、言語を獲得した人間は、動物として身体を使って外部環境を分節（「身分け」）すると共に、言語によっても外部環境を分節（「言分け」）して認識する事を知った。後者は前者をたちまち凌駕し、外部環境は意味に満たされた世界へと変えられ、人間はその中心

に身を安らげる存在となった。

こうして、本能を人間があらかた失った時に、それに代わるシステムである言語を手段として文化が発明された。だから文化は後天的で恣意的な、言わば無根拠な制度である。それ故に、種としての人間の本能が単一であるのに反して、世界各地の文化は際限なく多様であり、自文化中心主義 (ethnocentrism) による異文化の迫害は、今もって人間存在の宿業でさえあるようだ。

無根拠なものである以上、女性が男性を交換する文化もありえたはずだ。だがそうした結婚の形態が何処にも現れなかったのは、新石器時代以降の人間社会の全てが生産手段である土地の専有をその存立基盤としていたゆえである。

脱工業化や情報産業化が驚くべき速度で進展している今、土地の生産手段としての絶対的な価値や肉体労働の意義が急激に低下しつつあり、その結果、漸く女性の交換としての結婚制度が揺らぎ出しているのである。

ただし、来るべき結婚の形態とは男性の交換としての結婚ではなく、女性の交換でも男性の交換でもない結婚であろう。いや、今や、結婚という長く人間を縛ってきた制度自体の存在意義が疑われ、更にはその基礎にある性の差異化すら根底から問い直されつつある。

この新しい世紀末に、我々は確かに或る極めて重大な人類史的転換点に差しかかりつつあると言える——古い「人間」の基盤を超えて。

アフリカと女性の移行の公示

さて、今回の記事は被写界深度を思い切り大きく採り過ぎたかも知れない。今大急ぎで、アフリカ女性の結婚に伴う移行と名前の変化という話題に立ち返らなければなるまい。

ただ、アフリカの現実、前項で素描した未来図から最も遠い。ボーダレス化した現今の世界状況では、人々を国境の枠内で同質化し、国民として集散的に主権を行使させようという、フランス大革命以来の国民国家理念が既に現実にもそぐわないとする論調が目につく。だが、そ

の一方で多くのアフリカ諸国はまだ国民国家建設の途上で混迷し、呻吟している。そして、アフリカの女性は交換の客体であり、人生を賭して「移行を生きる」存在であり続けている。

先に、全ての女性がケニヤッタにも比肩できる経験をしてきたと述べた。ただし、両者には名前の変更に関して決定的な違いがある。

結婚に伴う女性の移籍には、名前、特に姓の変更が伴うかどうかの差がある。日本や欧米の慣行は変更を強制的に伴う例であり、一方中国や韓国・朝鮮の慣行には変更が随伴しない。

後者は明確な単系出自 (unilineal descent) 社会の典型的な例だが、アフリカもまたそれが卓越する地域である。結婚による女性の移行は、髪形や衣装、装身具などの類型的变化によって公的に表示されてきた。だが、現在ではその慣行も廃れてしまった地域が多い。

父系社会の二類型と子称

しかし、同じアフリカの父系氏族社会であっても、女性の結婚による移行のあり方は単一ではなく、鋭い対照が存在する事を見逃してはならない。例えば、ケニアのルイア諸民族やグンイ人では、女性は結婚後も父親の氏族に属する。すると女性は夫の家族の中でも全霊的な構成員ではなく、生涯余所者にとどまり続ける。

特に氏族が独自の領地を持って集住する場合、女性は往々底深い孤独を生きる事になる (連載第6回参照)。赤ん坊への命名の機会が夫の親族たちの心ない仕打ちに対する鬱憤のはけ口として利用されるのは、このような社会である。そこでは、あてこすりのメッセージが子供の属性とは直接無関係な命名に託されている。一方、ケニアのカレンジン諸民族では、女性は結婚と共に夫の氏族に編入される。

通例女性は出産後に「○○の母」という子称 (teknonym) で呼ばれるが、両者では、その社会・心理的な意味や機能が大きく異なっている。今回は、それをつぶさに考察しよう。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)